

## <辛口時評>

### 壊れる人間社会の生態系

先日、日ごろから正義感の強い友人の一人が腕に包帯を巻いてやってきた。夜、車で帰宅途中、前の車が蛇行を繰り返すので信号待ちの際降りていって注意すると、いきなり車から数人の若者が出てきて殴りかかってきた。身の危険を感じたとき後ろのダンプカーから運転士が降りてきて追い払ってくれたので事なきを得たという。「何を見ても、もう2度と注意したりしませんよ」と弱々しい笑顔を見せた。

最近、大阪で小学校の児童8人が教室に入ってきた暴漢に刺殺される悲惨な事件があった。車内暴力も目立つ。「もう少し詰めて」といっただけで、足を踏んだ踏まないのトラブルで、殴るけるの暴行を受けて死ぬ人が続いた。家庭内暴力、学校・職場でのいじめ、児童虐待、少年犯罪が後を絶たず、出会い系サイトにからむ殺人事件も続発した。キーワードはどうやら「キレル」「ムカつく」である。

こうした事件を見ていると、人間社会の生態系がいま大きく壊れてきているのを感じる。公害・環境問題で自然生態系の破壊については社会の関心も高く、さまざまな対策がとられてきたが、肝心の社会の生態系の破壊については、これまであまり深い洞察もなかったし、的確な対応策がとられてきたとも思えない。

人間社会の生態系は、何千年も続いた農業社会の中で原形が作られたが、工業社会への転換で革命的な変化が起こった。とくに都市の誕生は人間社会の生態系を大きく変えた。人間はムラやイエの規制から解放されて自由になったが、孤独になった。生産手段からも切り離され、賃労働が生きる糧となり、新しい社会問題が続発した。しかし、今からみればかなり緩やかな速度で、しかもヒューマンスケールを極端に超えない範囲で進んだので、なんとか人間はこの変化に対応してきた。

しかし、ヒトゲノムから宇宙までの私学技術の発達や工業社会から知識・情報社会への移行、グローバルズムやIT革命の急進展は、スピードの点で、スケールの点で、これまでの文明転換とは比べものにならない複雑なインパクトを人間の内外両面にもたらしつつある。

人間社会の生態系と言ったが、基本は社会的な人間関係のことである。伝統社会では、家族やコミュニティの中で人間は自然自得的に人間関係＝生きる術(すべ)を身につけてきた。また、そうしなければ生きていけなかった。飢餓と貧困のムチが生きる術を身につけるための社会的強制装置として働いた。

しかし高度工業化に伴う全土都市化、企業社会化の進展はコミュニティを壊し、家族的連帯を崩

し、生きる術の自然自得装置を破壊してきた。さらに「豊かな社会」は引きこもりやパラサイト族など、シンドイ人間関係を結ばずに生きられる経済的余裕を生み、人間関係習得への社会的強制装置を解体してきた。

子供たちは生きる術＝人間関係づくりについて基礎能力不足のまま、社会に出ていく。ちょっとしたことで傷つき、その挫折から社会的不適応を起こし、一方では不登校や引きこもりという陰(いん)の症状を起こし、他方ではキレたり、ムカついたりするとすぐ暴発する陽の不適応になる。

インターネットによる米国支配を憂慮する都市研究家のP・ヴィリリオは「危ないのはマクドナルドでもコカコーラでもない。見たり聞いたりすることがもたらす影響は、食べたり飲んだりするのは比較にならぬほど大きい」と言っている(天声人語5月30日)。

確かに情報社会では、TV、携帯電話、インターネットをはじめ、多様なメディアを通じて膨大な情報が洪水のように人間を襲う。情報は玉石混交であり、とめどなく欲望を刺激する商業主義ムキ出しの情報は、幼い魂に破壊的作用をもたらしかねない。いや大人の心をもむしばむ魔力を秘めている。「外部環境が破壊されているだけではない。人間自身の内部でも、(自然の)美しさや偉大さをおそれる気持ちが破壊されている。人間は真に価値あるものが見えなくなり、反省という人間らしい行為に専念する時間を奪われ、ごくわずかな不快刺激にも耐えられなくなっている」(K・ローレンツ)。

グローバリズムやIT道命が進む高度情報化社会が、人間社会の生態系にいかなるインパクトを与えつつあるのか、哲学的洞察や社会科学的究明があまりに立ち遅れていることを痛感せざるをえない。